

2024年4月26日-7月15日

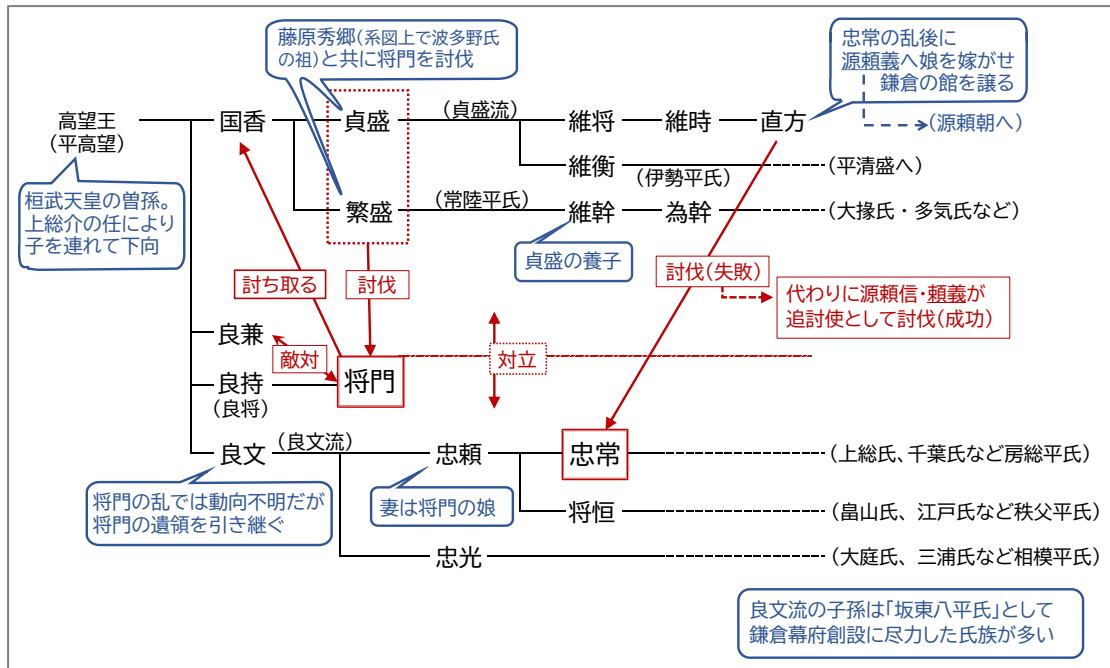
# 平安時代から鎌倉時代へ

## 東国にあらわれる武士政権の萌芽

平安時代中期の承平5年(935)、常陸国(茨城県)で起きた平氏の争いは後に「平将門の乱」と呼ばれる戦となり、同時期に瀬戸内海で起きた藤原純友の乱とともに朝廷へ衝撃を与えました。乱の鎮圧後も東国では抗争が続き、長元元年(1028)「平忠常の乱」にも影響します。これらの乱は首謀者も鎮圧も地方在留の平氏・源氏・藤原氏といった軍事担当の貴族で、自ら武力で紛争を解決する人々でした。将門の乱が起きるのは、後に御堂関白として知られる藤原道長が生まれる30年ほど前で、都の朝廷で藤原氏が権勢の最盛期へ向かう頃。東国では武による乱を鎮圧するため武に頼る状況だったのです。

やがて保元元年(1156)に皇族・摂関家の抗争から起きる「保元の乱」では武力戦で都を焼き、世は平家と源氏などの武家同士が争う戦乱の時代となります。

平安時代前期～中期の平氏略系図 / 平将門・平忠常の乱関係図



保元の乱で同陣営だった平清盛と源義朝は後に対立し、平治元年(1160)に後白河上皇やその近臣の対立も絡み「平治の乱」が起こります。この戦で義朝が敗れて死亡し、やがて清盛が武士でありながら政治の実権をとるようになります。しかし平家一門の政権独占が強まると反発を招き、治承4年(1180)に後白河法皇の皇子である以仁王を旗印に源頼政らが平家打倒を掲げて挙兵、以後は義朝の子である源頼朝などによる平家への反乱が各地で勃発します。「治承寿永の乱」と呼ばれるこの一連の戦は、寿永4年(1185)壇ノ浦の戦いで平家が族滅し終焉しました。この後の頼朝は、対立した弟の義経の討伐を端緒として建久元年(1190)奥州の平泉を拠点とする藤原氏を征し、鎌倉を中心とした武家政権が成立しました。

# 平将門の乱 後の武士の台頭を決定づけた武力による反乱と鎮圧

平安時代初期、東国に皇族の高望王たかもちおうが平の姓を賜り上総介となって下り、その子らが周辺で勢力を広げるようになりました。そのうちの下総国（千葉県）に所領を持つ一族だった平将門たいらのまさかどは、承平5年（935）に一族内の争いで合戦となり、常陸国（茨城県）で叔父くにかの国香を討ちます。この勝利で将門は関東で勢力を広げますが、在地の豪族と国守の紛争に介入し国守を追い出したことで朝廷から反逆とみなされ、追討軍が派遣されました。この軍を率いて将門を討ち取ったのが、国香の子である平貞盛さだもりと、下野国で強い軍事力を持っていた藤原秀郷ふじわらのひでさとです。当初は平氏へいし一族内の紛争でしたが、背景には、将門など地方の軍事貴族が、摂関家の藤原氏など中央の公家と結びついていたことや、都から派遣された官人と在地の豪族の争いが複雑に絡み、大きな乱になったと考えられます。

## 藤原秀郷 説話も残る兵（つわもの）、将門を討った英雄

藤原秀郷ふじわらのひでさとは、百足退治むかでの説話などに登場する俵たわらの（田原）藤太とうたの名でも知られます。父は下野国（栃木県）国府の大掾だいじょう（三等官）をつとめる官人でした。しかし、秀郷は内容は不明ながら「罪人」として流刑とされた記録があります。ですが、在地で勢力があり軍事力を持つ秀郷に国府が対抗できず、刑は実行できなかつたようです。このように関東で強い軍事力を持つゆえに、秀郷が将門の乱を鎮圧に起用されたと考えられます。

乱の後、秀郷は朝廷から従四位に叙せられました。これは同じ追討軍の平貞盛が従五位上であることを見ると破格の賞であり、朝廷が秀郷の功の大きさを認めたことがわかります。後に説話で武勇が語り継がれ、東国には系図でこの秀郷を祖とする秀郷流を称する武士の一族が現れました。波多野氏も秀郷の子孫と名乗る一族であり、さまざまな系図で秀郷流と記されています。

## 平忠常の乱 源氏が東国への基盤をつくるきっかけとなった戦

長元元年（1028）、房総地域を中心に勢力を築いていた平忠常たいらのただつねが、安房国に赴任した安房守惟忠を殺したことから始まる乱です。朝廷は平直方たいらのなおかたらを派遣しますが3年経ても平定できず、改めて源頼信みなもとのよりのぶらが派遣されると、忠常は戦わずして降伏したとされています。この乱は平氏同族間の対立も絡んでいたとみられ、平氏の良文流よしぶみりゅうに連なる忠常さだもりが、貞盛流の直方による追討で頑強に抵抗し、後任の源頼信には恭順したのは、その影響とも考えられます。波多野氏祖とされる佐伯経範さえきつねのりもこの時に頼信の軍に属していたようです。乱後、直方は鎌倉の屋敷を頼信へ譲り、頼信の子である頼義よりよしへ娘が嫁ぎます。これが後に頼信の子孫である頼朝が鎌倉幕府を開くきっかけになりました。